



リンゴは、どうして赤い^{あか}の

種^{たね}をまいてもらうため、目立つ^{めだ}色^{いろ}になる

リンゴは、切^きってみると、真^まん中^{なか}に種^{たね}があります。リンゴの実^みは、リンゴの木^きが、子孫^{しそん}を残^{のこ}すため、鳥^{とり}や、サル^{さる}などの動物^{どうぶつ}に、種^{たね}をあちこちにばらまいてもらえるように、用意^{ようい}するものです。秋^{あき}になり、種^{たね}が熟^{じゆく}したころ、赤^{あか}い目立つ^{めだ}色^{いろ}になり、実^みもあまくおいしくなって、「さあ、食^たべごろです。食^たべにきてください」と、鳥^{とり}などに知^しらせているのです。

鳥^{とり}やサル^{さる}たちが、実^みを食^たべた後^{あと}、あちこちに、ふん^{ふん}や食^たべかすをまいてくれば、リンゴの木^きは動^{うご}けなくても、遠^{とほ}くまで、子孫^{しそん}をひろ^{ひろ}げることができるのです。

リンゴの赤^{あか}い色^{いろ}は、アントシアン^{しきそ}という色素

リンゴの実^みがうれていないころは、葉^はと同じ^{おな}緑^{みどり}色^{いろ}をしています。葉^はと同じ^{おな}、葉^は緑^{みどり}素^そという色素^{しきそ}があるからです。秋^{あき}になり、昼^{ひる}間の時^{まじかん}間^{かん}がだんだん短^{みじか}くなってきたり、昼^{ひる}と夜^{よる}の気^き温^{おん}の差^さが大き^{おお}くなってくると、葉^は緑^{みどり}素^そがこわれてきます。そして、太^{たい}陽^{よう}の光^{ひかり}をあびて、アントシアン^{しきそ}という色素^{しきそ}ができてきます。そのため、日^{にっ}光^{こう}がよくあたたか側^{がわ}から、リンゴが赤^{あか}くなっていくのです。「祝^{いわ}い」という文^も字^じが、うき出^でたリンゴが売^うられていたりしますが、これは、青^{あお}いリンゴに文^も字^じをはりつけて、光^{ひかり}があたらないようにして作^{つく}ったものです。

リンゴ農^{のう}家^かでは、まんべなくリンゴに赤^{あか}い色^{いろ}がつくように、木^きの下^{した}に、光^{ひかり}を反^{はん}射^{しゃ}するものをしいたりして、工^く夫^{ふう}をしています。

秋^{あき}に、葉^はが赤^{あか}くなるのも、葉^は緑^{みどり}素^そがこわれて、葉^はにたまった糖^{とう}分^{ぶん}が、アントシアン^{しきそ}に変わ^かるためです。リンゴが赤^{あか}くなるのと、よく似^にています。(監^{かん}修^{しゆ}・矢^や野^の 亮^{りやう})

